

6月3日(水) クラス経営(2)

何も闇雲に生徒たちとぶつかったわけではない。私には微かだが勝算があった。クラスの子の中に、私の思いを理解して反対勢力とのパイプ役を担ってくれる女子がいたからだ。案の定職員室に戻った私のところにその女子がやってきた。

「先生、『みんなあんな担任の言うこときかんとこう。これからは無視や』って怒ってる。どうしよう」

「大丈夫。時間はかかるだろうけどきっとみんなわかってくれる。私はどのクラスにも負けない、一番のクラスを作りたいと思っているだけだから」

無視状態はしばらく続いた。何かあるたびにパイプ役の女子が報告に来てくれた。なんとかクラスを良くしたい。みんな思いは同じだった。

文化祭が近づいてきたある日、とうとうある生徒が切り出した。「先生、文化祭どうすんの。いつまでもこんなん続けてられへんし。何の出し物するのかみんな考えてようよ」

「そうやな。私はこのクラスを学校で一番のクラスにしたい。文化祭も、体育祭も常に優勝を目指す。それから、周りのクラスから『あのクラス楽しそうでええな。みんな団結してるな』って言わせたい。力を合わせて頑張ろう」

事実、卒業までのすべての行事で一番になった。卒業式で、一番私に反発していた生徒が答辞を読んできた。

そのときは気づかなかったが、そのときの学年主任は、どうなることかとハラハラしていたという。私が暴走しているのを見て、実はそっぽを向いている女子たちに根気強く話をしてくれていたのだ。

30年以上も前のことだが、未だに鮮明に覚えている。

